
STEINS;GATE **もう一人の観測者**

zero

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

STEINS・GATE もう一人の観測者

【Nコード】

N1690Z

【作者名】

zero

【あらすじ】

この世界は一つじゃない。

自分たちがいま見ている世界は、何百何千何万何億に分岐している……そんな数えきれない中の一つ。

プロローグ

この世界は一つじゃない。

自分たちがいま見ている世界は、何百何千何万何億に分岐している……そんな数えきれない中の一つ。

人間は気づかない間に、世界の分岐先を選択しているだけ。

それに気づかない愚かな人間を、神は唯々静観し続ける。

そして、神は人間に静かに語りかける。

時は戻せない。

それが当然で必然なこの世界。

世界は変えられない。

人間一人に変えられることなど、世界から見れば塵よりも小さなことばかり。

過去は振り返る事しかできない。

だから人間は、失敗を避けることが出来ない。

そう。

神を超えるなど、あり得るはずがない。

あつてはならない

* * * * *

暑い。

時計を見ると、時刻は正午辺りの一番気温が高まる時間だった。

七月二八日

風見智也かほみとせは、秋葉原の人ごみを歩いてきた。

というのも、夏休みになつてからずっと寝床になつている、“未
来ガジェット研究所”通称“ラボ”には、人目も気にせずにエ
ロゲーを黙々と続ける橋田至はしだいたる 通称ダルしか居らず、なんとも退
屈だったからである。

今日、幼馴染である岡部倫太郎おかへりんたろうと椎名まゆりしいなは、“ラジオ会館ビ
ル” 通称“ラジ館”でドクター中鉢によるタイムマシンの講演
会に行くらしい。

岡部の話によると、そのドクター中鉢という人物がタイムマシンの原理について解明した、といったものらしいが、胡散臭くてしょうがない。

(…………どこかで涼もうか)

日光があまりにも強すぎて額に汗が滲み始めていた上に、そろそろお腹が空いてきたので、どこか飲食店に入ろうと周りを見渡してみよう。

すると、真つ先に目に入った場所に風見は自然と足を運んでいた。

“メイクイーンニヤン?”

ここは秋葉原でも一番有名なメイド喫茶であり、あの椎名まゆりのバイト先でもある。

洗練されたメイドしか働いていない、と常連客からは謳われている辺り、実力はそれなりにあるのだろう。風見はたまたま橋田　ダールについていく程度なので、どうこう言えるような立場ではないのだが、確かに接客力は他の店と比べれば段違いであると思っている。

「いらっしやいませ、ご主人様　　あ、智也だニヤン、来てくれてありがとニヤ」

「…………相変わらずだね、留未穂」

「ニヤニヤ?　留未穂って誰のことかニヤ?　はっ…………まさか智也、フェイリスという女が居ニヤがらー!」

「何だよその妄想設定は！　というか、毎回そのネタするの止めてよ……」

「智也がそんな男だったなんて……フェイリスはかなりショックニヤ。あれだけ……あれだけ愛し合った仲ニヤのに……」

「早く席に案内してくださいお願いします、”フェイリス”さん。俺は暑くて今にも死にそうなんです……」

「一名様、御案内ニヤーン！」

「……はあ」

全く、毎度毎度ありもしない妄想を振りかけられる身にもなつて欲しいものだ。

先程からニヤンニヤンうるさいのは、この店を経営している秋葉留未穂るみほ　店ではフェイリスという二つ名を持つ少女である。

まだ記憶があるかないかくらいの頃に、風見家と秋葉家が仲が良くて彼女とはよく一緒に遊んでいたらしい。

風見自身はあまり覚えていないのだが、どうやら留未穂ははつきりと覚えているらしい。よくも十数年も前の記憶が残っているものだ、と風見は彼女の記憶力に感嘆している。

「智也、」注文はどうされるのニヤ？」

名前で呼ばれている風見のほうに、周りにいる常連客は少し冷たい視線を送ってきた。

というのも、留未穂……いや、フェイリスはこの店で人気ナンバーワンメイドである。だから、そんな彼女からかなり親しげに名前を呼ばれて、その上いちゃいちゃしているとすれば他の客からすれば良い気はしないだろう。

「いつも通りオススメなやつをお願い。あ、飲み物はアイスコーヒ
ーで」

「かしこまりましたニヤー！」

留未穂は小柄な体を厨房のほうへ急かしていった。

そういえば、彼女は高校へ通っているのだろうか。一つの店を経営しながら高校に通うというのは、かなり厳しいものだと思われる。大学生になつて幼年期以来の、しかもここ最近になつて再会した風見には留未穂のことについてはほとんど何もわからない。

再会してからはメールや電話でやり取りをしているものの、表面上の内容くらいしか分かっていないのだ。

(それにしても……今日は暑いな)

水を飲みながら、ガラス窓越しに見える秋葉原の人ごみを見る。暑そうな顔をしながら歩道を歩いている人の様子を見るだけで、また汗が滲み出て来そうで嫌になってくる。

「やっぱり……智也も、世界の異変に気づいていたのかニヤ？」

「……………え、何が？」

背後からやってきた突然の留未穂の発言に、風見は理解しきれずに目を点にして彼女を見つめる。

「そんなにもつたいぶらなくても良いのニヤ……………。今日というこの日に、世界に大きな変化が起きようとしている……………そう、智也の視線が言っていたニヤ」

「別にそんなことは無いと思うけど……………」

「実はフェイリスも智也と同じ……………シャープフェイス鋭利な洞察眼を持っているニヤ。選ばれし者がこうして出会ったのも運命……………智也、フェイリスと一緒に世界を壊そうとする悪を裁くために協力して欲しいニヤン……………！」

「わ、分かったから、取りあえずコーヒーを飲んで落ち着かせてくれない？」

「……了解ニヤン！ 智也はガムシロップとミルクは入れる派かニヤ？」

「うん、お願い」

全く、こっちが油断したと思えばすぐに何かを仕掛けてくる……。
一応、留未穂がフェイリスというキャラを被っているのは分かっているのだが、どうしても慣れてはくれない。

岡部くらの厨二病くらいだったら、なんとかなるものなのだが

「な、何！？」

「んー？ どうしたのかニヤー？」

「いや、やけに近いから……！」

「フェイリスは、ただ混ぜ混ぜしてるだけなのニヤン」

どうしてガムシロップとミルクを混ぜるのにじつと見つめながら、顔を近づけてくる必要性があるのだろうか。

留未穂の甘い吐息が風見の首元をくすぐって来て、思わず固まっ
てしまった。

(こ、これがダルの言っていた……………“目をみて混ぜ混ぜ”!?)

もしかすると、ダルがしきりに言っていたフェイリスの必殺技
目を見て混ぜ混ぜなのかもしれない。いや、どう考えてもこれが
そうなのだろう。

留未穂の艶のある視線と香りを一方的に注がれている状態に、風
見はドキドキが止まなかった。

なるほど、確かにこんなことをされれば男などイチコロである、
と風見はすぐに納得することが出来た。

「智也、顔が赤いけど……………どうかしたのかニヤ？」

混ぜ混ぜを終えた留未穂が、目を細めながらそう尋ねてくる。

彼女は風見のことを見透かしたうえで、そんなことを聞いてきて
いるのだろう。なんとも意地悪な女だ、と風見は心の中で愚痴りな
がらも、彼女の真っ直ぐな視線が未だに脳裏に映し出されて、顔に
血が上ったままだった。

「べ、別に……………。ただ、いきなり留未穂が近づいてきたから、ドッ
キリしたただだよ」

「ふーん……。本当に、それだけかニヤーン？」

「それだけだよ！」

「ニヤン……。まあ、今回はこれくらいで許してあげるニヤン」

「はあ……。全く。そういえば、今日のオススメって何？」

「そ・れ・は……。来てからの楽しみニヤン！ きっと智也の大好物なものニヤ！」

「そっか……。それじゃ、楽しみに待っておくよ」

「はいニヤー！」

長話を終えると、留未穂は他のお客の元へ行つてまた楽しそうに会話をしていた。

彼女にとってはこの仕事は生甲斐になっているようだなによりだ、と風見は少し微笑みながら彼女を見つめる。

すると、その視線に気が付いたのか留未穂はこちらに笑みを向けてくる。その笑顔が眩しくて、風見は思わず視線を逸らしてしまっ

た。

(また、何か言われるんだろうな……)

留未穂の行き過ぎた妄想話がまた始まる……とため息をつきながらも、心の奥底では少し楽しみにしているようにも思えた。

逆にそうでなければ、留未穂と連絡を取ったり、メイクインに足を運ぶことなどあり得ないだろう……。

(……甘いな)

一体ガムシロップを何個入れたんだ、と苦笑してしまうほどにアイスコーヒーは甘かった。

もはやコーヒーの味がほとんどしていない辺り、最低でも三個は余裕で入れられているのだろう。まあ、“目を見て混ぜ混ぜ”に負けた風見が悪いのだが

「お待たせしましたニヤン！」

そんなアイスコーヒーを三分の一辺り飲んだ時、視界の端に留未穂の姿が映った。

手元には丸い大皿が持たれていて、湯気が上がっているように見えた。

そんな彼女のほうを見ようと、風見は視線を上にも動かそうとする

「
ッ!？」

しかし、風見の瞳には留未穂の姿は映らなかった
突然、数秒くらいの頭痛を感じ、視界が真つ暗になったと思っ
たらそれは徐々に収まっていく。

「な、なんだ……？」

少し痛む頭を押さえながら、風見はゆっくりと目を開ける。

「智也、大丈夫!？」

「ん……大丈夫。少し頭が痛くなって……」

まず目に入ったのは、心配そうな目でこちらを見つめている留未

穂の瞳だった。その瞳は、フェイリスではなく、秋葉留未穂の瞳だった。

店内で思わずキャラ口調も忘れてしまうほどに、自分は苦しそうにしていたのだろうか。

「よ、良かった……ニヤ」

実はまだ少し頭痛が残って頭がフラフラしているのだが、これ以上留未穂を心配させたくないが為にやせ我慢をしていた。

我慢強さだけは人一倍持っているので、これくらいは恐らく大丈夫だろう。

「それで、今日のオススメは何なの？」

「……ニヤニヤ？ 今日の智也は珍しながらもオススメじゃニヤくて、スパゲッティを頼んだのニヤ」

「……………え？」

一瞬、留未穂の言葉を聞き入れた耳を疑った。

俺が、“スパゲッティ”を頼んだ？

確か俺は“オススメ”を頼んだはずなのだが？

「智也、本当に大丈夫かニヤ……？ まさかいまの頭痛で記憶に影響が」

「あ……いや、ちょっと勘違いしてたみたい。頭痛で少しパニックになってたから」

「というものの、いまだに風見の心の中はパニック状態が続いていました。」

目の前に置かれたスパゲッティは、どうみてもオススメのものではない。

オススメというのは、メニューに載ってないものであり、それがメニューにあるスパゲッティと被るはずがないのだ。

それに、風見が頭痛を感じる以前に見たのは、丸い大皿だったというに、いま目の前にある皿は楕円の中皿だったのだ。

(どうということなんだよ……!?)

ふと、目に入ったのは半分だけ飲み干されるコーヒードット。確か先程までは三分の一くらいしか飲んでいなかったはずなのだが……。

(……………苦い!?)

それを試に飲んでみると、ガムシロップは入ってなかった。頭痛で苦しんでいる間に誰かがコーヒーを取り換えたのだろうか。いや、そんな猶予は無かったし、もし取り換えられていたとしてもそれは留未穂が近くに居たのだからできないだろう。

だとしたら留未穂がやったのか？

いや、留未穂がそんなことをするとは到底思えない。

仕事場で商品を用いて、冗談をしかけてくるような人ではないことは風見も知っている。

「何、だよ……何なんだ、これは……。何がどうなって」

これは夢なのだろうか、と思えてしまうほどに風見は思わず岡部のように独り言を漏らしてしまう。

これはもしかしたら

「今日の智也は、まるで凶真みたいなのにヤ……」

「……っ、そうだ！ 留未穂、シャープアイズ鋭利な洞察眼つて覚えてる!？」

「ニヤニヤ？ シャーぷ、あいず、かニヤン？ ……ちよつとよく分からないのニヤ」

「そ、そう……か……………」

「智也……?」

もしかしたら、自分はSFによく出てくる平行世界パラレルワールドというものに
来てしまったのかもしれない。

確証は無いのだが、いまのスパゲッティとコーヒーの甘さ、そして何よりも留未穂と風見との記憶の異なりが、そうであると確信させてくる。

(ん……オカリンか)

現状に困惑している風見に、岡部からの着信が来たのですぐに通話ボタンを押した。

「……………もしもし?」

『はぁ……………はぁ……………、と、智也か!?』

「オ、オカリン? どうしたの?」

電話越しからも岡部の息が酷く上がっていることが分かる。
何か事件に巻き込まれたのだろうか……と少し不安になる。

『やはり俺は、機関に狙われているらしい……ッ！ 気づかぬ間にこの鳳凰院凶真に洗脳を施し、最終的には乗っ取るつもりなのか……ッ！?』

「あーえつと……今日は何時に無く激しいね」

“機関”という単語が出た瞬間に、風見はため息をつきそうになった。

彼の厨二病度は人一倍……いや、人十倍はあるだろう。いつも見えない敵と戦っていて、事あるごとに携帯を取り出して独り言を言出すのだが、正直人前とかではやって欲しくないものである。

『……グアアアア！！ クッ……やめろ、俺を中に……入って来るな！ ……智也、いますぐにラボへ帰ってきてくれ！！ ……機関への対抗策を考えねばならん』

「でも、いまメイクインでご飯食べてるし」

『ご飯などどうでも良いのだ！ 代金なら後で払う！ いま機関を打破しなければ、明日という日は存在しないのだぞ！?』

「はあ……分かったよ。すぐに行くよ」

それに、タイミングがタイミングだけに、もしかしたら風見に起きた異常な現状と何かしら関係のある事かもしれない、と思えたのだ。

「留未穂、ごめん。急用ができたみたい……」

「……凶真がピンチなのニヤ！ この場はフェイリスに任せて早く行くのニヤ……！」

「……うん！」

せっかく留未穂が作ってくれた料理なのに、ほとんど全部残してしまった。

その罪悪感に潰されそうになるが、いまはラボに向かう事を優先しなくてはならない。

（それにしても……さっきのは何だったんだ）

座っていた席のほうを振り返っても、やはり机に置いてあるのは

スパゲッティだった。

（もしかしたら……本当に世界が）

留未穂が何気なく言った冗談が現実になる
今日というこの日、世界に大きな変化が起きる

何気ない日常が、歪曲し始めていた

第一話

「ただいま」

風見は空腹を感じながらも、メイクインから歩いてラボへ帰ってきた。

夏場はやはり外を出歩くだけで体力を奪われるようで、すぐにもソファに寝そべりたい気分だった。

「智也、遅いではないか！！ 例の話となれば、一刻を争うと常に言い聞かせていただろう!?」

「はいはい、妄想設定乙。しかも何で今になって例の話って隠してるん？ いつつも機関機関っていつてるじゃん」

「おい、ダル!! いまその名前を出すんじゃない!! ……奴らに感づかれたらどうするのだッ……………!!」

「……………はあ」

風見はここ最近で一番のため息をついた。

暑苦しい中わざわざ出向いてきてやったというのに、岡部とダルのいつものしょうもないコント染みたやり取りを見せられる身にも

なつて欲しいものである。

まあ、ある程度こうなるとは予想はしていたのだが

「ん……………お客さん？」

「あ……………お邪魔してます」

ふとラボを見渡すと、見慣れない女性が彼らから少し離れていた場所にいた。

ここに来客が来るのはかなり珍しい事であり、風見も少し目を丸くして彼女を見る。ここに来るといふ事は、余程の用が無い限り来ないはずだろう。

「ここにいる彼女はクリスティーナだ」

「だからクリスティーナじゃないっていつてるだろ！……………私は牧瀬紅莉栖まきせ くれすです。えっと……………」

「ああ……………俺は風見智也って言います。よろしく、牧瀬さん」

「よろしく、風見君。……………はあ、やっとまともな人が来てくれて良かったわ」

「ぬあんだその言い様はー！　まるで俺たちが、まともな人間じゃないみたいではないかー！！」

「いや、オカリンが変質者なのともかく、何で僕も同類なん？　この扱いには、遺憾の意を発動せざるを得ないお」

「口を慎め、スーパーハカーよ！！　変質者はお前だ、ダル。……この狂気のマッドサイテイストである鳳凰院凶真と同類……？　貴様は自分をかなり過信しすぎている……この俺に並べる者などこの世界中……いや、全宇宙中にも存在しないだろう」

「いや、いい加減その設定なんとかならんの？　つーか僕はハカーじゃない！！　“スーパーハッカー”！！」

「黙れHENTAIども。……いきなり人の体を触ってくるわ、勝手な変態妄想押し付けてくるわ。そんな奴らのどこがまともだって言うのよー！！」

何やら話の流れが掴めないが、取りあえず牧瀬と変質者達にいざこざがあったことは分かった。

まあ、初対面である二人のキャラにまともに対応するのは難しいだろう、と風見は苦笑いをしてやり取りを見届ける。

「ん、“マキセクリス”って……聞いたことがあるような」

いつの日か何かの雑誌で牧瀬紅莉栖という名前を目にした記憶が蘇る。

名前の漢字が印象的で、なんとなく頭の中に残っていたのだ。

「牧瀬氏は、かの有名なサイエンス誌に論文が掲載された天才少女だお」

「ああ、そうだ。この前見た雑誌に載ってたんだ！……で、どうしてそんな牧瀬さんがこんなところへ？」

アメリカの大学を飛び級で卒業した正真正銘の天才である牧瀬紅莉栖が、こんな名前だけはラボらしいような場所へいるのだろうか。どう考えても岡部やダルと出会うような機会があるとは思えないだろう。

すると、牧瀬の顔つきが少し険しくなりはじめる。

その彼女の表情から、どうやらシリアスな感じの話になっていくらしい。

「それは、偶然にしては不自然すぎるちょっと気になった事があった
て」

* * * * *

「つまり、牧瀬さんとオカリンとダルが同時に頭痛を感じて、その後から三人ともに何故か共通した記憶が植えつけられた、ということかな？」

「まあ、要約するとそんな感じね。……はあ、それにしてもなんでこんなことが起きたのかしら？ こんな現象があつたなんて話は一度も聞いたこともないし……」

牧瀬から聞かされた話は、科学の天才の口から発せられるとは到底思えない、あまりにもファンタジー過ぎたものだった。

岡部とダルは大学の単位取得のために“タイムマシンについて”の講義会場に向かい、そこでその講義の講師である牧瀬と出会った。講義を聞いている途中であろうことが岡部が食って掛かり、ディベート式の講義に変更された。

そして、そこから当然の如く牧瀬による岡部の論破劇が繰り広げられていき……講義の終盤に、頭痛云々の下りが起きたというわけである。

「そのいきなり入り込んできた記憶って、どんな内容なの？」

「うーん……それがモヤモヤして分からないのだ。ただ、俺とダルとクリスティーナがこのラボで一緒に活動をしていた……ような気がする」

「そうそう。なんというか……根拠のない確信ってやつ？ それが僕ら三人の頭の中にあるんだお」

「でも、私たちはあの講義までに、今まで話すどころか会った事もない。なのにお互いがその存在を良く知っていると突然理解していた……それも同時に。ここが一番の着眼点ね」

何かのデジャヴのようなもの、と単純に結論付けるにはあまりに偶然が重なり過ぎているだろう。それが、三人の話し合いによる答えであった。

岡部やダルにとっては適当に流せば終わるような話かもしれないが、牧瀬にとっては自分の理解の範囲を超えた現象であるが故に、正確な答えに辿りつくまで納得が行かないのだろう。

ぶつぶつと独り言を言ったり、ホワイトボードに手を止めることなく頭が痛くなるような数式を書き続けたりしている姿を見ると、やはり彼女は本当に天才なのだとな納得させられた。

「智也は俺達と同じような現象が起きたか？」

「あ……そういえば」

岡部たちの話の内容が強烈過ぎて、先程メイクインで自分の身に起きた出来事を完全に忘れていた。

「何！？ まさか、智也も俺たちと同じ現象が」

「いや、それはないわね。だってもしそうだったら、風見君は私に会った瞬間にあんな初対面な反応は見せないから」

「む……確かにそうだな」

気が付くと、牧瀬は独り言や計算をやめてこちらを向いて話を聞いている。

情報が乏しい分、風見が持っている情報も取り入れて考えなおそうとしている、ということだろうか。

「えっと……俺はさっきメイクインに居ただけで、そこで多分オカリンたちと同じ頭痛は感じたよ。……けど、その後に知らない記憶がパツと頭に浮かんだとか、そういうことは無かったよ」

「……それって、単に智也氏がタイミングよく僕らと一緒に頭痛こ

じらせただけ」

「しっ……橋田はちょっと黙ってて。それで、その代わりに何かあったの？」

天才はこちらの話の流れも簡単に読むことが出来るのか、と感心する。その代わりになんて一言も言っていないというのに……。

ダルは少し小さくなりながら椅子に座る。

そんな彼を見ていて悲しくなりながらも風見は話を続ける

「代わりに、頭痛を感じる以前以後で世界が変わった、というかなんというか……」

風見に起きた現象を、相手に上手く伝えることが出来る言葉が思いつかない。

というよりも、自分で言っていてこれが本当に起きたことなのかどうかという自信が無くなってきたのである。

「起きたことを全部話してくれる？ 多分、今の私たちだったらどんな内容でも全部聞き入れることが出来ると思う」

「分かったよ……。まず、俺は」

* * * * *

風見は、今日朝から起きたことをできるだけ詳細に牧瀬に伝えた。彼女の目つきが変わったのは、やはり頭痛を感じた後に、注文した料理と、アイスコーヒーの量や甘さが変化していた、ということろだった。

これを留未穂やまゆりに話しても、冗談だ、と聞き入れてくれな
いと思うが、牧瀬は風見が話したことを全てを疑うことなく聞いて
いた。

「頭痛を感じる前後で、自分の記憶と世界との間に誤差が出来てい
た、というわけね」

「……パラレルワールド平行世界に来た、という感じだな」

風見が真つ先に思ったことを岡部が言う。

やはり一般的な解釈だとそういった答えに辿りつくということな
のだろう。

「平行世界なんてSFの中だけの話よ。そんなこと言い始めたら思考が停止する」

やはり牧瀬は何かしらの科学的現象として証明をしたいらしい。

「……ならば、他になあーにがあるというのなあ？」

岡部は軽く馬鹿にされたのが気に障ったのか、突然に鳳凰院凶真に変身していた。

どうやら彼は彼女にどうしても対立したいらしい。

「それは……まだ、分からないけど。でも、絶対に万物の出来事には科学的な要因が関係してははずだわ！」

「……はず、だと？ ク、クク……フハハ………フウーハハハ！
！ そんな根拠の無い答えで、この狂気のマッドサイティストである鳳凰院凶真が納得すると思っているのか？ この天才HENTAI少女よッー！」

「ぐぬぬ……こんな奴に揚げ足を取られるなんて！ ……とい
うか、私はHENTAIじゃないッー！」

天才は否定しないところが、流石と言ったところだろうか。

「俺は揚げ足を取ってるのではない。単に事実を言っているだけなのだよ、クリスティーナ」

「だからクリスティーナじゃないって言っとろうが!! 私の名前は紅莉栖、だ!!」

なんだこれは。

先程まではシリアスだったというのに、いつの間にか漫才をしているではないか。

「まあまあ牧瀬氏、少しもちつけ。別にHENTAIだからって気にすることは無いと思うお。むしろ僕たち男性陣にとっては大歓迎です」

「うっさい! お前ら二人はちょっと黙ってる!!はあ」

ダルが珍しく場を鎮めようとするのかと思えば、やはり更なる燃料投下であった。

全く、二人が悪乗りすると本当に止めることが出来ない……。

「牧瀬さん、なんだかごめんね。この二人も、多分そんなに悪気が

あつてこんなこと言ってるわけじゃないと思うから……」

一々反論するのモウンザリしてきている牧瀬は、少しだけ顔の力を緩めてこちらを向いてきた。

「……うん、もう風見君だけが頼りだね。二人で話を進めていきましょつ」

「はは……」

岡部とダルのほうを見ると、少しやり過ぎたといった顔をしているように思えた。

まあ、そうやって反省していてもしばらくは牧瀬はそちらを向かないから、どうしようもないのだが

第一話（後書き）

文量よりも投稿頻度を上げて行こうという思いから中途半端な所で切りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1690z/>

STEINS;GATE もう一人の観測者

2011年12月9日01時00分発行